

## 序——「われらの時代」を想う

『専修大学法学研究所紀要』第44号『刑事法の諸問題X』を刊行するに当たり、玉稿をお寄せ頂いた日高義博客員所員、柴田守客員所員、稲垣悠一所員、岡田好史所員にまずは心より御礼申し上げると共に、編集の労を執って下さった渡邊一弘事務局長にも併せて御礼申し上げます。

また、本年度は、法科大学院の小宮文人所員、法学部の小野新所員、庄菊博所員、田口文夫所員、出口正義所員、広瀬崇子所員、宮城啓子所員を定年退職でお送りすることとなった。これら先生方の研究・教育・大学運営に対するこれ迄のご貢献に敬意を表すると共に、法学研究所に対するこれ迄のご尽力にも衷心より感謝の意を表し、且は先生方のご健勝と今後の益々のご活躍を祈念したいと思う。

私が『法学研究所紀要』の巻頭言を綴るのはこれが最後となる。この機会に、ここ数年、私の脳裡を去来する言葉を紹介することで、その責めを塞ぐことをお許し願いたいと思う。

自らがかつて抵抗運動を行ったナチスドイツ時代を回顧して、マルティン＝ニーメラー牧師は次のように語っている。

ナチが共産主義者を襲った時、私は少し不安になったが、私は共産主義者でなかったから、何もしなかった。次に、ナチは社会主義者を攻撃した。私の不安は少し増大したが、私はやはり社会主義者でなかったから、何もしなかった。それから、学校が、新聞が、ユダヤ人などが、次々と攻撃され、その度に私の不安は増したが、私は依然として何もしなかった。そして遂にナチは教会を攻撃した。私は教会の人間だったから、私は行動した。しかし、もはや手遅れであった。

*They Thought They Were Free*と名付けられたミルトン＝マイヤーの著書に記されたこの言葉（田中浩／金井和子訳『彼らは自由だと思っていた』（未来社、1983年）では167頁）を私が初めて読んだのは、丸山真男「現代における人間と政治」（『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1964年、475－476頁）の中での引用によってであった。その時、言い知れぬ戦慄を感じたことを、よく覚えている。丸山は、六〇年安保直後の政治状況下でこの言葉に注目しているのだが、翻ってみると、自分自身がやがて「私は自由だと思っていた I Thought I Was Free」と過去を回顧せねばならない状況が決して来ないと、自信をもって断言出来るだろうか。——現政権の下、社会の複合劣化が進んでいく中で、そういう不安を感じていた折も折、片やアメリカ現代文学を専門とする知り合いから、片や行政法を研究する同僚から、ほぼ同じ時期に、それぞれ全く別の機会に、「最近、この言葉が気になって仕方がない」という便りを受け取って驚愕した。更に、どこかで講演で社会学者の上野千鶴子氏がこれに言及しておられるのも聞いた。専門分野を異にし、世代と性別と政治的立場をも異にする何人もの人が、かかる不吉な言葉を同時に想起する時代は、どう最良みにみても——たとえ表面上は如何に享楽に満ちていようとも——幸福な時代とは言えないだろう。それにしても、自分は自由だと信じて疑わない人、マックス＝ウェーバーのいう「精神なき専門人、心情なき享楽人」が我が世の春を謳歌するこの時代にあって、ギリシャ・ローマ以来の人類の叡智を伝統として持ちながら、しかも「今」の課題とも切り結ぶ法律学・政治学を学ぶ者は、果して何を為し得るのだろうか。また、何を為すべきなのであろうか。その使命は甚だ重く、その道は険しいと言わねばならない。

ニーメラー牧師の言葉と共に、私が中学生の頃、当時まだ40歳代だった父親が夕食後、居間にゴロンと横になったまま、ふと漏らした一言が時々私の脳裡を過る。

ひょっとしたら、今が一番いい時代なのかも知れんなあ。お前が大人になった頃は、今よりいい時代ではないだろうな。

父親がどういう積りでこう呟いたのかは分からない。1930年代に生まれ、戦中から戦後、高度経済成長期を駆け抜けてきて感じたことがポロツと口を衝いて出ただけのこと、もとより深く考えて言ったのではないだろうし、そもそも当の本人はこのように口走ったことなどすぐに忘れてしまったに違いない。しかし私には、日頃剽軽なことを言って私たち家族を笑わせてばかりいた父親が、妙にしみじみと漏らしたこの一言がずっと気にかかっている。その父親も既に逝き、この世にない。私はとうに、父親が息子に向かって斯く呟いた年齢を大きく超えてしまった。しかも、やはり時間の経過と共に、とりわけアンソニー＝ギデンズのいわゆる「再帰的近代」の様相が濃化するのに伴って、この言葉は一層重みを増してくるように思えるのだ。

私は自分に問いかけてみる、「君たちの時代は今の時代よりもきっと幸福である筈だ」と次の世代に向かって自信をもって言えるだろうか、と。残念ながら答えは否である。実際、私たちの上の世代が戦後嘗々と築いてきた成果を守りながら、そこに新たな価値を加えていくのは容易ではない。しかし、如何に困難で気が重くなる営みであろうとも、それでもなお、次の世代に自信をもって受け渡すことが出来る時代を作るための挑戦から、私たちは逃避する訳にはいかない。他でもない、好むと否とにかかわらず、この「今」こそが「われらの時代」(大江健三郎)なのであるから。

2019年1月28日

専修大学法学研究所長 前川 亨